

# まんなか



## 新本館・体育館竣工

学長 難波正義

二〇一一年十二月に建て替えるの工事を始め、二〇一二年十二月現在、本館と体育館の建て替えはほぼ終わりました。現在本館の取り壊しや、その跡地の整備などが進行中で、二〇一三年三月三日(日)に竣工式を行う予定です。



私が二〇〇二年四月に本学に着任して以来、皆様のご支持で本学の環境もかなり変わりました。大学の下の郵便局のある広い道路から大学の坂道までの道路の拡張と整備、坂道下の車庫の移転による坂道登り口の整備、坂道の拡張などです。ただ、坂道をなくすることが出来なくて残念に思っています。学生さん達の良い運動にはなりますが、本館には学生さんが小グループで集まって学習できるセミナー室を多く作りました。落ち着いて勉強できると思います。また、体育館は従来ものより広く、公式のバスケットの試合ができます。問題は建物がよくなっても、中身がどうなるかです。本学に優秀な学生さんが全国から集まり、本学がレベルアップするかどうかです。同窓の皆様には、ぜひ本学が全国的にがんばっていることをPRしていただき、できるだけ多くの学生さんに本学への入学を勧めていただきたいと思っています。よろしくお願いたします。

今年は例年にならない寒さですが、同窓の皆様は益々のご健勝とご活躍を祈念いたします。



絵・森田祥子

発刊 新見公立大学・短期大学(岡山県新見市西方二二六三の二) ☎〇八六七―七二―〇六三四

編集 学報編集委員会

# 看護学科

様々な人の支えの中で

一年次生 加納 司

今年も無事に、「第三回看護学セミナー」を開催することが出来て本当に嬉しく思っています。私を含め、昨年から引き継いでくれた三名の二年生と新しく二年生三名、一年生六名を加え、心機一転四月からスタートしました。昨年の反省を生かしながら、先生方や学生の協力もあり、スムーズに看護学セミナー開催に向けて進行することが出来ました。途中、勉強会の資料集めなどで苦労した事もあり、テストが間近に迫っている中で看護学セミナーの活動は大変だったと思います。

今年度は、「救命救急に学ぶ」というテーマで主に災害看護、ドクターヘリ、高度救命救急について講師の方々に講演をして頂きました。講演を聞いて、救命救急の仕組みやチームワークの大切さなどを改めて実感しました。また、東日本大震災での看護師の具体的な活動に



ついて知ることが出来ました。災害看護について過酷なイメージが多く残りましたが、同時に人々を救えるというやりがいを感じられる仕事ではないかと思えました。

## 看護学部三年次生の臨床看護学実習が始まりました

澤田 由美(実習調整委員)

二〇一二年年初秋、学部三年次生の臨床看護学実習がスタートしました。新しい病院を開拓した領域、実習内容を洗練させた領域……、教員はそれぞれの実習目標が最大限に達成できるよう、病院・施設・学校等と検討を重ね、準備してきました。学生が看護の対象者とのように出会い、どのような学びを結んでいくのでしょうか。学生の体験には必ず意味があり、出会いは必然です。教員は実習指導者との連携を深めながら学生の学びをしっかりサポートしていききたいと思います。

## 成人看護学実習を終えて

三年次生 斎藤美和・高蓋知奈津

私達は実習を通して改めて患者さんとの関わり方について考えさせられました。一つ目は、コミュニケーションの重要性です。単に会話をするだけではなく、患者さんの表情や雰囲気を読み取り、小さな変化に気づくことができる力が必要だと思いました。

二つ目に、患者さんの個性に合

わせたケアを提供することです。患者さんによって、手順や方法などがことなってくるので臨機応変に対応する柔軟な対応が必要となってくる実感しました。また、患者さんが自分でどこまで出来るのかを把握し、全てを援助するのではなく、見守ることも重要な看護の一つであると思いました。

三つ目は、患者さんはいつ急変するかわからないので、明日もあるから大丈夫と思わず、そのときのケアを一生懸命行うことが大切だと思いました。

これらの経験から、患者さんの心に寄り添い、不安や苦痛を少しでも軽減できるような看護師になりたいです。そのためにも、今回実習で学んだことを生かして、日々精進していききたいと思います。

## 生活支援看護学実習

(サテライト・デイ)の学び

三年次生 衣笠優美・横路彩香

サテライト・デイでは参加者のニーズに合わせた健康教室やレクリエーションなどの準備・企画を行っていました。初めは、限られた時間内での準備や、慣れない進行、運営に戸惑い、自分達の役割を果たしきれなかったです。しかし、実際に回を重ねることで毎回の話し合い、反省修正を行うことにより段々とよりよいものへと皆で創り上げていくことや、自分自身の自信や成長に繋がりました。

このサテライト・デイの実習は、学生側が一方的に疾病予防のための知識を提供するのではなく、参加者との関わりを通して私たちの知らなかった人生の先輩としての歩みや知識、思いも同時に知り、学ぶことができました。

新見市の現状として、山間部での暮らしは公共機関や外部との関わりが弱く、参加者の方々から「楽しみになっていた、元気をもらった」などの言葉をもらい、QOLの向上にも繋がっているのだと実感することができました。

今までの病院実習では看護としての視点で関わってきましたが、今回のサテライト・デイでは、人と人の繋がりが関わりの深さの大切さを再確認することができました。

看護とは、人との関わりという基盤があつてこそ、寄り添った看護を提供することができるのだと学びました。今回の実習の学びをこれからの実習や将来の自分を成長させるために生かし、継続していくことで、実になつていくものだと思ひに留めておきたいと思ひます。



地域福祉学科

英国研修の学び

助教 松永 美輝恵

私は、「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」という内閣府事業で、十月の約二週間、英国に派遣していただきました。英国では、コミュニティ活動における高齢者の参画意識やサポート体制を知るために、大使館や各省庁、中間支援組織や高齢者ケア現場等を視察し、意見交換も行いました。そのなかで特に学べたことは、政府・行政と民間・個人とのパートナーシップの取り方、組織マネジメントのあり方などです。さらに、この派遣を通して、日本の



制度・施策、施設は充実しているものの活用が十分なされていないと感じました。私は、これらの学びを今後の介護福祉士養成に生かしていきたいと思っています。皆さんと一歩前へ：行きましよう！

介護フェア

一年次生 大河内 茉耶

十一月十一日は「介護の日」です。十一月十日に岡山県総合福祉会館にて約六百人の参加者を迎えて「介護フェア」が行われました。イベントは、二部の構成で、第一部では、介護福祉養成校十校による銭太鼓、手話歌、ミニコンサート、介護予防体操、創作・手話劇、うらじゃ踊りなど、どのパフォーマンスマンスも会場を大いに盛り上げるものばかりでした。私達は、授業「音の文化論」で練習し、新見の伝統行事「土下座祭り」でも演奏したお囃子を披露しました。私達が日頃学校で学んでいることを多くの人に知っていただき演奏できたことは、とても嬉しく思いました。合わせて、学びを同じくする介護福祉士養成校の学生同士の交流ができたことに新鮮な感動とともに励みともなりました。

第二部では、東京家政大学名誉教授の樋口恵子先生による「利用者から見た介護への提言」についての記念講演があり会場の席が満席になりました。樋口先生の笑いを入れながらのお話は、とても分かりやすく聞き入りました。このようなイベント

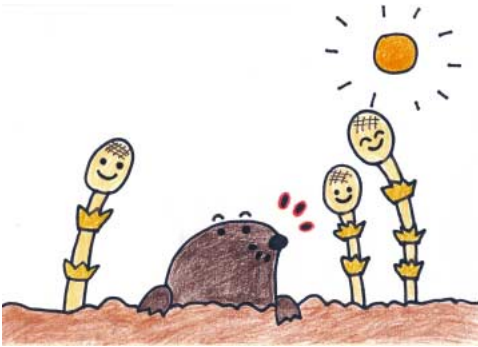
に参加でき、介護についてたくさんを知れて、見れて、学べて、本当に充実した一日になりました。

井倉郷土料理

学科長 井関 智美

十二月八日(土)に井倉公民館で地域のお年寄りの指導を受けて郷土料理作り(鯖寿司、巻ぎずし、高吉備だんご汁・けんびき焼き)を行いました。参加者は、地域の方三十九名、学生七名、引率教員二名でした。

鯖寿司やけんびき焼きのいわれを高齢者から聞きながら会食し新見地域の食文化を学びましたが、お年寄りの皆さんの生き生きとした学生に教えてくださった姿が印象的でした。午後は、地域福祉学科二年生による認知症予防演習を行い、クイズ、早口言葉、記憶テスト、ボール遊びなど脳を動かす演習を行い認知症予防のPRをしました。



絵・八嶋夏美

母校自慢 第15回

\*愛媛県立大洲高等学校

一年次生 西村 星

私の母校は愛媛県の南予にあり、大洲高校は、明治三十四年愛媛県立宇和島中学校大洲分校として創立され、その後、愛媛県立大洲中学校として独立、昭和二十四の高等学校再編成による大洲高等女学校の統合を経て、普通科、商業科、定時制普通科肱川分校からなる総合制高校となりました。現在、一万九千八百三十人の卒業生が巣立っている伝統のある高等学校です。

学校行事も盛んであり、毎年九月には、藤樹祭という仮装行列、体育祭、文化祭があります。中でも仮装行列は各クラスが自分たちで決めたテーマで仮装し、地域を大名行列のように歩く県下でも無二の行事があります。地域の人もこの仮装行列を楽しみに沿道に詰めかけ、学校と地域が一体となつて楽しめます。このような行事が行われていることに、改めて誇りを感じます。

私は、大洲高校の卒業生として新見公立短期大学で学び、将来は介護福祉士として故郷に貢献できる人をめざして頑張っています。

## 幼児教育学科

### 他大学の「同志」たちとの交流

一年次生 伊藤 花

平成二十四年十一月二十四日、松江市の島根県民会館で第五十三回中・四国保育学生研究大会が開催されました。私たち幼教一・二年生は早朝五時にバス二台で出発しました。夜明け前ということでもとても寒く、眠かったのですが、バスに乗っていると遠足気分的なわくわく感も湧いてきて、楽しみな気持ちも高まってきました。

会場に到着後、新短生は開会式から閉会式まで様々な発表や催し物を観ました。私が衝撃を受けたのは他の大学の舞台発表の創造性の豊かさやクオリティの高さです。特に印象に残ったものとしては「ブラックシアター」「にじいろのさかな」が挙げられます。真つ暗闇のなかで泳ぐ魚、軟らかく動くタコなどが、リアルに表現されているところに惹きつけられ、感嘆しました。

もちろん、幼教の先輩たちの舞踊も新短生らしい規律性に満ちたキビキビした動き、隊列の変化があり、力強さを存分に表現していました。

どの大学も大会に向けてたくさん練習を積んでいるということを感じ、また、それぞれの発表の中に子どもたちに伝えたいメッセージや、子どもたちが楽しめるような工夫が

詰め込まれていて、とても刺激的でした。レベルの高い発表の数々を目の当たりにして、「追いつき、追い越せ」という意欲が強まりました。

大会のフイナーレでは、会場の全員が笑顔で踊り、一体感を分かち合えたことが今でも忘れられません。この大会に参加して同じ目標を持っている「同志」と時間・空間を共有できたことで、改めて保育についての問題意識を深めることができ、とても良い経験となりました。この収穫が多かった一日を今後にかしていきたいと思います。

### 養護と教育を食べる子ども

一年次生 松川 恵子

保育とは養護と教育の一体である。初めての實習では、この言葉を改めて感じる機会がとて多くありました。設定遊び、給食、午睡……その全てに養護と教育のねらいを持った援助がありました。改めて實習を振り返ると、自分が園児だった時に見た保育士の姿を思い出します。

私は食べるのが遅いうえに好き嫌いが多く子どもで、給食の時間は文句ばかり言っていました。「食べたくない」「もう絵本が読みたい」、私がそう言う度に、保育士は「もう一口頑張ろう」「これが食べたら絵本読めるよ」と言葉がけをしてくれました。そして、私が一口食べると「頑張ったね」と笑顔で褒めてくれました。しかし、私が嫌いな食べ物

を口から吐き出した時には真剣に叱ってくれました。「どうして吐き出したの？」と聞かれ、私が「美味しくなかったから」と答えると「お野菜さん悲しいって泣いてるよ」と言って泣き真似をしました。すると何だか吐き出した野菜が本当に泣いているように見え、胸が罪悪感でいっぱいになりました。私が野菜に謝ると保育士は「じゃあ、新しいお野菜はきれいに食べようね」と言い、吐き出したのと同じぶんだけの野菜を皿によそってくれました。その後、保育士の応援もあつて、私は野菜を全てきれいに食べることができました。

駄々をこねる私の情緒の安定を図る「養護」の言葉がけや、吐き出された野菜の気持ちを考えようとする豊かな心情を培うための「教育」の言葉がけ。保育を志す者となった今考えると、私も沢山の「養護」と「教育」が一体となる「保育」を受けた者の一人でした。保育士になった時により良い「保育」ができるように、勉強や實習を頑張つていきます。

### 巣立ち—今羽ばたく

二年次生 中村 彩乃

二年前の二月十四日。私は、世間の女子とは少し違うドキドキした気持ちで、パソコン画面に向かっていました。「あつた!」。新短に合格し、晴れて保育者という夢への第一歩を踏み出すことになりました。

入学時、「子どもと関わる仕事

したい」という思いが強い一方で、幼児に関する知識は限りなく乏しかった私。通学時に見かける園の先生の姿は、改めて意識すると眩しすぎて、遠い世界の人のように感じました。しかも、慣れ親しんだ地元長崎を離れての一人暮らし。学ぶ分野も生活の場も何もかもが初めてという状況で、私は不安の渦中にいました。

そんな私に希望をくれたのは、四月中旬の先輩方の姿でした。学生交流会で披露された劇「かさじぞう」は、わずか一年先輩とは思えない完成度!驚きと尊敬とともに、この日を境に先輩方が大目標となりました。それから幾多の学びと實習を重ねて、今の私がいまいます。日々の濃さは私の自信となり、同じ志を持つ友の存在は、辛い時も私に力を与えてくれました。両親から、「彩乃、最近先生らしくなったね」と言われ、新短の素晴らしさを実感しています。

全国各地の、異なる生活圏の人と関わるができるのも、新見に来ただけの特権でしょう。様々な見方・考え方に触れ、コミュニケーション力も身につきました。

今春、私は地元保育所の現場に立つことになりました。この二年間の貴重な学びを生かし、今度は私が「せいせい」となり、子どもの成長に携わっていきたいと思います。支えていただいたすべての人に、感謝いたします。

## 地域看護学専攻科

### 公衆衛生看護研究を終えて

後山 典子

この研究は、専攻科の合格通知を受け取った時から始まりました。

今は、研究発表も終わり少しほっとしています。ここまで来るにはたくさんの方の苦勞がありました。しかし、それとともに仲間や先生方の励ましに支えられました。放課後や空き時間に研究室を訪れても嫌な顔一つせず対応して下さいました先生、ゼミにおいて助言をして下さった先生方には感謝しても仕切れません。そして、仲間同士で辛い時や楽しい時を共にし、励ましあつてきたことで終えることができました。修了後は離ればなれになってしまいますが、これからも仲間を大切に、新しい場所で頑張っていきたいと思っています。



### 専攻科一年をふりかえって

藤野 莉沙

今年も、毎日が忙しく楽しく充実した一年でした。入学してすぐに公衆衛生看護研究のテーマ決めから始まり、私はこの一年を乗り越えられたのだろうかという不安と保健師になるという希望の気持ちで一杯でした。実習では、学校保健室実習から始まり、市町村実習、産業実習、家庭訪問などどれも内容は濃く公衆衛生の深さを学んだことから、より一層保健師になりたいという気持ちが強くなりました。実習中には就職活動も同時進行で専攻科全員が奮闘した一年でした。この一年間で学んだことを胸に、社会に貢献できる保健師活動を行っていききたいと思っています。

山田 理恵

とても忙しく振り返る間もない一年でしたが、多くの出会いや学びがあり、とても充実した濃い一年となりました。びっしり講義に実習、研究、疫学調査などたくさん学ぶことを学びました。保健師になるという夢をもちながら、お互いに切磋琢磨してきました。さまざまな経験を持つ仲間との学生生活は人としても成長できたのではないかと思います。辛くて投げ出してしまいたいと思つたこともありました。仲間がいたからこそ今があると思えます。私が専攻科で得たものは、一生の宝物です。支えてくれた仲間や先生方、両親に感謝の気持ちで一杯です。

## 同窓会のコーナー

### 幼児教育学科一期生同窓会開催

一期生 武川 広子

平成二十四年八月十八日に岡山市内で幼児教育学科第一期生の第三回目の同窓会を、二十名の卒業生と三名の先生の参加で楽しく開催することが出来ました。不思議なもので、何年も会っていないにもかかわらずなんと三十年前の学生の気分が気兼ねなく話ができるのもうれしく思いました。

この三十年以上で大学の様子もかなり変わって来ていますが、新しく発展して行ってくれるのはうれしい反面、昔の面影がなくなるのは少々寂しく感じました。



私たちの年代になると子育てが一段落し職場復帰している方がかなりおり、みんな自分らしく頑張つてやっています。では、一期生のみならず、五年後にお会いするのを楽しみにしています。

### 同窓会支部会の開催について

同窓会係 村田 二郎

同窓生と大学の「絆」を深めるため五年ぶりに各地域で支部会を開催しています。九月三十日には二十五名が集い新見支部会を、又十二月一日には十六名が集い岡山支部会を開催しました。学科や学年を越えた同窓会であり、和気あいあいとした時間を過ごすことができました。

引き続き二月十六日には兵庫支部会、近日中に松江・出雲支部会を、又他の地域でも順次開催します。詳細は郵便でお知らせします。寒い時期の開催ではありますが、暖かく楽しい会を企画しておりますので、お友達をお誘いの上ご参加ください。

なお、ご住所を変更される場合は同窓会係までご連絡をお願いします。



看護学科十四期生同窓会開催

山本 智恵子(旧姓野田)

十一月二十三日(ラヴィール岡山(岡山市)において、九年ぶりの同窓会を開催いたしました。急な声かけだったにもかかわらず、同期生二十人と子どもたち七人が参加。静岡県や熊本県など遠くからも集まりました。今回は、お世話になった先生からのビデオメッセージを上映し、懐かしさに浸った会になりました。みんなと久しぶりに会ったのに、毎日会っていた短大時代と同じように話が出来る、本当に楽しい時間が過ごせました。また、近況を報告しあい、子育てや仕事、自分が体験した病気などを通して、大きく変化しているみんなの人生観に刺激を受けました。次回は来年春に開催することが決定しました。今回出席できなかった同期生の皆さま、次回ぜひ会いたいです！  
あの頃のようにならたら(ミスチル)をみんなで歌いましょう！



平成二十四年度 卒業研究テーマ一覧

【総合研究】幼児教育学科

■社会福祉指導教員 八尋 茂樹

●大学生による地域貢献活動の意義に関する一考察(駄菓子屋模擬店および市内探検プログラムの運営を通して)

遠藤 舞衣・木村 加奈  
佐伯 真愛・上甲 史佳  
松江 由佳

■教育学指導教員 武石 典史

●現代日本における出生率低下のメカニズム(社会構造と夫婦関係)

上野 耕平  
再虐待防止に向けた社会構築に関する研究(保護者支援という視座)

江川 舞

●家族のありかたに関する社会学的研究(分業する夫婦から協力する夫婦へ)

川崎 涼加  
●教育改革と格差に関する社会学的研究(学力問題の構造分析)

橋本 昌美

■音楽I 指導教員 安達 雅彦

●ミュージカル「アリスと鏡の世界」の制作 大江 由華・大谷 彩子  
越智 あかね・桐谷菜・佐藤愛子  
原 由奈・福島 梨恵

■音楽II 指導教員 吉村 淳子

●障がい児に対する音楽活動の効果に関する一考察(唾液アミラーゼ測定数値の結果から)

池田 珠美・伊藤 安那

■環境 指導教員 齋藤 健司

●幼児教育でのタブレットPC使用に対する教員・保護者の意識

上野 由貴・黒田 彩香  
科学的要素を取り入れた保育の再考 坂下 千尋

●保育に取り入れられる身近な素材を使った科学あそびの実践研究(科学あそびをテーマとした教材集の作成)

藤本静香・前園 みずき  
●タブレットPCを活用した保育への一考察(新見市の小・中学校における実践事例から)

宮原 千春  
●造形表現指導教員 岡本直行

●幼児期の環境と色彩感覚の関係について 田村 菜摘・松本 菜未

●影絵遊びに関する研究(保育現場での実践を通して) 溜池 志緒利

●お手玉の活用方法についての研究 中本 拓美

●モンテッソーリ教具の研究(保育現場と家庭での実践から) 真鍋 彩

●発達心理学指導教員 芝崎美和  
●自我体験のいきづまりと対人恐怖の満たされない自己、自己効力感との関連性 伊藤 まり

●大学生における同調行動がストレスに与える影響 狩野 あゆみ

●乳児期における向社会的行動の発達の様相(自由遊び場面での観察を通して) 川原 千明

●空想存在に対する幼児の实在性認識(年齢による差異と他児からの影響の有無) 中村 彩乃

●父親における父子間の絆および協同育児についての認識と育児参加との関連 藤尾 美月

■身体表現指導教員 片山啓子

●創作ダンス「海のともしだち☆カール」の作品制作と子どもの動き指導について 天喰 智彦・伊藤 有香

川野 恵里菜・佐々木 弥生  
友藤 ありさ・山田 愛

■幼児体育指導教員 渡部 昌史

●幼児の体格、運動機能の発達と遊具による怪我の関連性 市山 可蓮・西岡 詩織

●幼児の運動遊びと生活習慣の変化(一九九〇年代と二〇〇〇年代の幼児の比較を通して) 大櫃 朋子・門脇真凜

丸口 真弥

●幼児の運動能力向上に関する研究 松本 あかね

■幼児教育指導教員 伊勢 慎

●幼稚園実習におけるモンテッソーリ園と一般園の比較についての一考察(本学幼児教育学科2年生を対象としたモンテッソーリ教育に対する意識調査を中心にして) 川本 淳未

●乳幼児の生活習慣改善についての考察(A市における乳幼児の生活習慣の現状を通して) 天藤 怜奈

●出産経験のない学生が出会う保護 天藤 怜奈

者の気持ち理解についての一考察  
「出生前診断」の現状と本学学生の意識の実態調査を通して  
藤本 淑美

● インクルーシブ保育・教育についての考察  
本学学生の障がい児保育への意識調査を通して  
渡邊 ありさ

【地域福祉研究】地域福祉学科

■指導教員

● 趣味が高齢者に与える効果について  
井上 貴子

● 高齢者介護施設入所中の認知症高齢者が抱く「帰宅願望」への学生の介護習中の対応  
植田真奈美

● 東日本大震災における高齢者の被災状況と、避難時における高齢者への支援と対策  
夏井ますみ

● ドッグセラピーの現状とセラピードッグの日常  
野々内 遥

● ケアホーム入所者の現状と意識  
野村 実有

● あるデイサービス利用高齢者の生活に関する意識調査  
平田 良樹

● 介護福祉学生の入学時の介護福祉士の認識と在学時の医療的ケアの認識について  
藤原 宗樹

● 看取りケア経験と死に対する意識  
村田 瑠沙

● 家族介護者と被介護者の介護ストレについて  
山田菜津美  
伊藤 博康  
後期高齢者医療制度について  
審 美咲  
介護予防のための運動の有効性に

● 認知症高齢者に対する絵画療法の効果  
後藤 雅博

● 独居高齢者の幸福度  
「ふれあいいきいきサロン」の参加者へのアンケート調査から  
佐伯真実

● 日本・デンマークの福祉とその比較  
坂根伸吾

● 日本とスウェーデンの福祉体制の比較と現状  
篠原 久実

● アルコールのもたらす問題  
時光冨佳

● 園芸療法の現状とその比較  
園芸のもたらす効果  
森脇 彩香

● 知的障害者の労働について  
安井 章乃

● ユニットケアと従来型ケアにおける利用者の活動およびコミュニケーション量の比較  
松本 百合美

● 介護職員のケアプランに対する意識  
牛嶋たまみ

● 神石高原町における買い物困難者支援の現状  
加藤 俊二

● 親の「しつけ」に関する調査  
高年齢者と若年者との違い  
桑田 友華

● 家族介護者が認知症高齢者を介護する時に感じる幸福感  
高岡 愛

● 島しょ部における老々介護の実態と福祉サービスの検討  
玉井 翔太

● ケニアにおける福祉支援を必要とする人の現状と支援の在り方  
井上 香織

● 知的障害のある子どもの友人関係  
内田 優佳

● セラピードッグがもたらす介護職員への影響  
大西 紗希

● 音楽による高齢者の感情変化  
心の揺らぎと自立神経への影響  
片岡 奈穂

● 高齢者施設における介護スタッフの虐待に対する意識の現状  
原 佑也

● 特別養護老人ホームにおける介護職員間の連携について  
藤本 詩穂

● 認知症高齢者にバリエーションテックを用いたコミュニケーション効果への実践と考察  
大枝 万友

● 就労支援員が周囲の人々に求める知的障害者の就労サポートのあり方  
山本 勝也

● 介護職員の死生観について  
池田 明子

● スウェーデンと日本の在宅福祉と家族介護  
大谷 真世

● 介護学生の実習後のヒヤリハットの認識について  
杉本 康芽

● デンマークと日本の比較から  
日本の現状と今後の課題  
高砂 恭子

● 介護職員の夜勤におけるストレスの原因について  
グループホームと特別養護老人ホームに勤める介護職のストレスを比較して  
高砂 恭子

● 認知症サポーターの活動と現状  
橋本 実紀

● 学生のもつ介護のイメージ  
「キツイ」だけではない介護の魅力  
山本 彩加

● 治療をしながら在宅で暮らしている高齢者  
吉野 文

● 音楽のもつリラクゼーション効果が睡眠導入に与える影響  
足立 奈津美

● 介護施設で働く職員のアクティビティの認識に関する検討  
植村 佳澄美

● 食形態の違いが「食べやすさ」に及ぼす影響  
沖田 楓

● 嗅覚機能が低下した高齢者に対するアロマセラピーとタクティルケアが及ぼす心理的效果  
河野 諒子

● 認知症高齢者のストレスに及ぼす影響  
歌唱時と楽器使用時の比較  
杉原 あゆみ

● 介護実習が学生の介護職イメージの変化に与える影響  
谷口美佳子

● 要介護高齢者の施設入所に関する意識  
施設入所と在宅介護生活における当事者の思いの比較  
中村 麻美

● 知的障害者を支える家族の負担感の実際と望まれる支援に関する検討  
前野 明美

【公衆衛生看護研究】

地域看護学専攻科

■指導教員

國本政子・福岡悦子

- A市の中小記号従業員における精密検査の受診意図に関する認知的要因 後山 典子
- 職場における心理的・身体的ストレスと歯周病との関連性 小林 康平
- 喫煙者の禁煙行動に関する要因・トランスセオレティカルモデルを用いた検討 富田 真弓
- 大学生における対人ストレスの実態 富田 智子
- 母親の歯科保健行動が及ぼす子どもの歯科保健との関連 吉田 美穂
- 指導教員 藤原泰子・金山時恵
- 乳幼児を持つ母親の育児不安と自主的な活動がもたらす効果 越智 華子
- 高校生の健康観と生活習慣 大川 由美子
- 仕事を持つ母親の育児の現状と育児に関する自己効力感 小林 弥生
- 妊娠前の母親の経験・知識、育児の現状と育児関連ストレス 島田 由香
- A小学校高学年の食習慣の実態と楽しく食べることの関連性 平田 尋
- 複数の子どもをもつ母親の子育てへの思いと保健師に求められる支援 水田学弥
- 離乳に関する育児の満足度や不安感の現状と支援 山田 理恵
- 指導教員 矢庭 さゆり
- A町における高齢者の社会交流と生きがいとの関連 岡田 美紀
- 老人クラブ会員の運動に対する意識と保健師に求められる健康支援のあり方 島津 理

- A市に住む高齢者の自然災害に対する意識と防災行動の実際 藤野 莉沙
- 高齢者の孤独死に対する専門職と住民組織の意識 藤本 文香



絵・伊藤 花

### 受賞のお知らせ

平成二十四年度には逸見英枝先生に本学「名誉教授」の称号が授与され、四月に授与式が学術交流センターで挙行されました。逸見先生は開学時より教育・研究に力を尽くされ、学部長として短期大学の管理運営にも貢献されました。在任のご尽力を深く感謝いたします。さらに、本学地域看護学専攻科の藤原恭子特認教授が厚生労働大臣表彰を受けられました。記して慶祝の意を表したいと存じます。

### 平成24年度 進路状況

(2月15日現在)

学科	内訳	卒業者数 (人)	専門職 (人)	一般職 (人)	進学 (人)
幼児教育 [32期生]		52	45 (5)	0	2
地域福祉 [16期生]		51	38 (4)	2 (1)	5 (1)
地域看護学専攻科 [9期生]		16	15	0	1

( ) 内は、希望しているが決定していない人数

### お礼 本館及び体育館改築事業

この度、平成二十五年三月三日に本館・体育館の竣工式を挙行いたします。先立ちましては、卒業生をはじめとする関係各位の皆様には、施設設備・備品整備募金のお願いをしまいにまいりました。お蔭をもちまして、延べ人数二百五十名の皆様から三百五十四万五千三百七十二円のご寄附をお寄せいただきました。心より感謝申し上げます。



厳しい寒さも終わりを迎え、ときおり強く吹きつける風も、柔らかな感じさせる頃になりました。この春光の到来と軌を一にするかのように、新本館、新体育館が「誕生」しました。卒業生の皆さまからは、多くのご寄附、そして心温まるメッセージをお寄せいただき、ありがとうございます。心よりお礼申し上げます。本学を評する際、しばしば「学生と教員の距離が近い」というフレーズが用いられます。この枕詞は間違いいではないですが、学生・教員間だけでなく、事務職員、さらには卒業生の方々との距離も近い、といったほうがより適切なような気がします。ぜひとも懐かしい、そして新しい本学にお足をお運びください。開学当初から学生を見守ってきた大学前の急坂は今でも健在です。これから本学は、同窓会活動に今まで以上に力を入れていきます。皆さまが築きあげた伝統を大切にしながら、新たな新見公立大学をつくりあげていきたいと思えます。(武石)

### 編集委員

委員長

- 池田 明子
- 武石 典史
- 栗本 一美
- 木村 靖弘
- 原田 信之